HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポルトガル語における名詞句の統語構造
Author(s)	藤田, 健
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 124, 103(左)-135(左)
Issue Date	2008-02-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32429
Type	departmental bulletin paper
File Information	FUJITA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学文学研究科紀要　124　(2008 年 2 月) 抜刷

ポルトガル語における名詞句の統語構造

藤　田　　健

北大文学研究科紀要 124 (2008)

ポルトガル語における名詞句の統語構造

藤田　健

0．導入

名詞というカテゴリーは，具体的あるいは抽象的実体を指示する以外に動詞や形容詞に対応する事象を指示する場合もあるという，他のカテゴリーには見られない意味的特異性をもっている。統語論においては，このような名詞のもつ意味的特性に対応する形で，名詞句の統語構造に関する分析が提示されてきた。理論統語論において重要な位置を占める生成文法においても，決定詞という機能範疇の設定 (DP 分析) をはじめとする名詞句に関する研究が多くの言語事実を説明すると同時に，名詞句と文の構造の平行性について説得的な議論を展開してきた。

このような言語普遍的な名詞句の構造の追究と同時に，パラメータという観点から言語間の差異を明らかにするという視点も生成文法には存在する。主要部が補部に先行するか後続するかという主要部パラメータによる基本的な構造の違いの捉え方はもとより，主要部パラメータは同一の設定がなされているが他のパラメータに関して異なる設定がなされるという分析も進められている。例として，ゲルマン諸語とロマンス諸語はいずれも主要部先行型言語であるが，外項が実現される位置が異なってくるという事実が，新たなパラメータの設定によって説明される。本稿が研究の対象とするポルトガル語はロマンス諸語に属するが，所有者を表す所有形容詞の分布に関して他のロマンス諸語とは異なる特徴を示す。更に，動詞派生名詞において名詞の項が実現される場合に，具象名詞には見られない特異な制約が観察される。本

稿の目的は，ポルトガル語の名詞句の構造を明らかにすると同時に，名詞の項が統語的に実現される際にどのような制約が課されるかを説明することにある[1]。

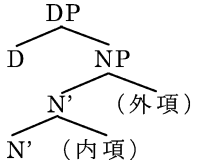
1．Giorgi and Longobardi（1991）の分析

本節では，イタリア語やフランス語を中心とするロマンス語における名詞句の構造を包括的に分析した研究として Giorgi and Longobardi (1991)（以下 GL）の分析を概観する。名詞句に対応する構造として，機能範疇である決定詞（determiner）を主要部とする DP を設定する DP 分析を採用しており，その主要な主張点は以下のようにまとめられる。

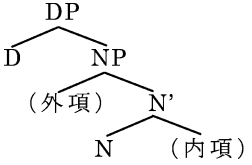
(1) a．名詞句において，外項の要素はロマンス語では右側に，ゲルマン語は左側（指定部）に生起する。
b．所有を表す要素はイタリア語ではN’の外側にAとして，英語・フランス語ではDとして実現される。

(1 a) に従うと，イタリア語の名詞句構造は (2 a)，英語のそれは (2 b) のように示される。

(2) a．



b．



また，所有者が代名詞として生起する場合には，(1 b) に従ってイタリア語と

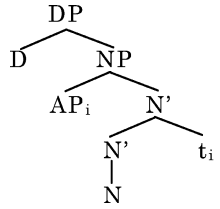
[1] 本稿は平成 19 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 19520320）による研究成果の一部である。

英語・フランス語でカテゴリーが異なるとする。イタリア語においては，所有者を表す代名詞（所有形容詞）が主要部名詞に先行する場合と後続する場合がある。

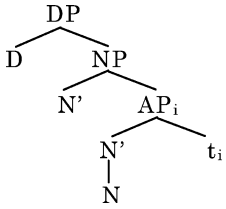
(3)
a．il mio libro　　b．il libro mio
(the) my book　　(the) book my

所有形容詞が名詞に先行する場合，所有表現である AP が NP 指定部に移動する。名詞に後続する場合には，所有形容詞は項の位置から通常の形容詞の位置であるN'付加部へと移動すると分析される。

(4) a．



b．



この構造をもとに，GL はイタリア語と英語•フランス語の名詞句に見られる様々な現象を説明している。

GL の提案する名詞句の構造に関する分析は説明力が高いものであると言えるが，本稿が扱うポルトガル語の名詞句に関する現象を説明するには適切であるとは言い難い。特に，所有者を表す要素が形容詞であるとする分析は，ポルトガル語の現象を説明するためには維持できないものであると考えられる。ポルトガル語における所有形容詞をはじめとする名詞句内の要素のふるまいを観察すると，ポルトガル語については名詞句の構造に関して理論的に修正していくことが必要となる。

2．名詞句の基本構造

本節では，ポルトガル語における名詞句に関する基本的な事実を観察し，ポルトガル語の名詞句の基本構造を提示する。

まず，名詞句において重要な機能を果たす要素である定冠詞の分布を見て行く。ポルトガル語では，主要部名詞が省略され，定冠詞が修飾要素を伴って生起することが可能である。

(5) a．A Maria comprou o vestido de seda, eu comprei
(the) bought the dress of silk I bought
o de algodão.[2]
the [that] of cotton
〝マリアは絹のドレスを買い，私は綿のを買った。〞

b．Eu comprei o que tem riscas.
I bought the [one] which has stripes
〝私はストライプの入ったものを買った。〞

c．Eu comprei o amarelo.
I bought the [one] yellow 〝私は黄色いのを買った。〞

ただし，定冠詞が他の要素を全く伴わずに単独で生起することはできない。

(6) a．*A Maria viu as.[3]
(the) saw the

b．*Os são meus amigos.
the are my friends

[2] ポルトガル語では，人名を表す固有名詞に定冠詞がつくのが一般的である。

[3] 対格形人称代名詞は定冠詞と同じ音形を持つが，表記上は区別される。
A Maria viu-as.
(the) saw them

生成文法において，定冠詞はD主要部であると分析される。以上の事実は，Dが選択するNPが空の代名詞であることは可能であるが[4]，Dとの素性照合のために顕在的な要素を含んでいなければならないと解釈することができる。

次に，指示形容詞について検討する。ポルトガル語において，指示形容詞は定冠詞と共起することができない。

(7) a. Ela viu estas cartas.
she saw these letters 〝彼女はこれらの手紙を見た。〞
b. *Ela viu as estas cartas.
she saw the these letters

指示形容詞が生起する位置は一般的に名詞の前であるが，感嘆文や関係節を伴う場合には名詞に後続することが可能である。

(8) a. Que meninos estes!
what boys these 〝何て子達だ。〞
b. A violência atingiu níveis insuportáveis, situação esta que
the violence reached levels unbearable situation this that
fez modificar a atitude da comunidade internacional.
made modify the attitude of-the community international
〝暴力は耐えられないレベルに達し，この状況は国際社会の態度を変化させた。〞

指示形容詞は単独で生起し，指示代名詞として用いられる。修飾要素を伴うことも可能である。

[4] 空の代名詞が具体的にどのような要素であるかについてはいくつかの可能性が考えられるが，ここでは代名詞proが生起すると考えておく。

(9) a. Prefiro estes.
[I] prefer these 〝私はこれらの方がいい。〞

b. Elefantes e tigres são espécies ameaçadas. Aqueles
elephants and tigers are species threatened those
encontram-se ainda em África e estes na Ásia.
are found still in Africa and these in-the Asia
〝象と虎は脅威にさらされている種である。前者はアフリカに，後者はアジアにまだ生存している。〞

c. Esses de tacão ficam melhor do que aqueles que têm sola de
those of heel are better than those that have sole of
borracha.
rubber
〝このヒールのある方があのゴム底のものよりもいい。〞

(Mateus et al. (2003))

指示形容詞の統語的ステイタスは，基本的にD主要部であると考えられる。これにより，定冠詞と共起できない事実が説明される。ただし，定冠詞と異なり指示性が高い要素であるので，顕在的なNと素性照合する必要がない。このため単独で生起することが可能であると考えられる。主要部名詞に後続する指示形容詞については，D主要部ではなく品質形容詞と同じ統語的ステイタスをもち，NP内部に生起する要素であると考えられる。

次に，ポルトガル語の名詞句構造の議論において重要な位置を占めると思われる所有形容詞について考察する。ポルトガル語の特徴として，所有形容詞は一般に定冠詞や指示形容詞と共起する。所有形容詞はこれらの要素に後続し，主要部名詞に先行するという語順をとる。

(10) a. Esses teus defeitos enternecem-me.
these your defects touch me
〝これらの君の欠点は私の心を動かす。〞

b. São os nossos amigos franceses.
[they] are (the) our friends French
〝彼らは我々のフランス人の友人だ。〞

ただし,特定の環境において主要部名詞に所有形容詞が後続する場合もある。

(11) a. Tens aí livros meus. (冠詞を伴わない場合)
[you] have there books my 〝君はそこに私の本を持っている。〞
b. Tens aí uns / alguns / vários / bastantes / poucos /
[you] have there some several various enough few
diversos livros meus. (ある種の量化詞と共起する場合)
different books my
〝君はそこにいくつかの・数冊の・いろんな・かなりの・わずかの・様々な私の本を持っている。〞
c. Tens aí quantos livros meus? (疑問量化詞と共起)
[you] have there how many books my
〝君はそこに何冊の私の本を持ってるの。〞
d. Que fotografia tua tão bonita! (感嘆文)
what photo your so beautiful 〝君の写真は何てきれいなんだ。〞
e. Vi sete amigos meus. (名詞に数詞が先行する場合)
[I] saw seven friends my 〝私は7人の友人に会った。〞
f. Senhora minha, ouvi-me! (呼びかけ)
lady my hear me 〝御婦人,私の言うことを聞いて下さい。〞
g. Aquele é um amigo meu. (主語の叙述)
that is a friend my 〝あの人は私の友人だ。〞
(Mateus et al. (2003))

主要部名詞を伴わない所有形容詞は定冠詞や指示形容詞とともに用いられ,所有代名詞としての機能を持つ。

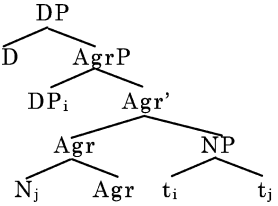
(12) a. Podemos ir para a minha casa porque a
[we] can go for[to] (the) my house because (the)
tua fica longe.
yours is far 〝君の家は遠いから僕らは僕の家に行けるよ。〞

b. Estes meus sapatos e esses teus estão a precisar de
these my shoes and those yours are to need (of)
limpeza.
cleaning 〝この僕の靴とその君のは磨く必要がある。〞

所有形容詞の統語的カテゴリーに関しては，形容詞ではなく人称代名詞の変化形であると考えることができる。そこで，所有形容詞は項である DP として NP 内に併合されると仮定する。DP なので格照合が必要となるが，格照合のメカニズムに関しては，以下のように仮定する。

名詞句は節と同様の構造をもつと一般的に考えられている。両者の平行性から，本稿では DP と NP の間に AgrP を設定する[5]。主要部名詞に先行する所有形容詞は，DP と NP の間に位置する AgrP の指定部に移動し，Agr のもつ所有格と照合される。これは，節における主格に相当する抽象格である。Agr は性・数に関する素性ももつため，その素性照合のために N が Agr に主要部移動する。

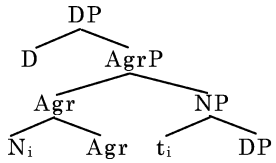
(13)



[5] ここでの AgrP は Radford (1997)，Haegeman and Guéron (1999)における FP と同じ機能を果たす要素であるが，本稿では一致による格照合という点に焦点を当てるので AgrP という表記を用いることとする。

これに対して，主要部名詞に後続する所有形容詞は，NP 内においてN主要部に対して属格の照合を受ける。属格は一般に前置詞〝de〟によって具現化されるが，所有形容詞は人称代名詞なので属格も形態格で標示されることになる。人称代名詞の場合，所有格と属格は同一の形式で実現されると考えられる[6]。

(14)



最後に，主要部名詞の項として生起する前置詞〝de〟によって標示される名詞句の統語的ステイタスについて考察する。この名詞句は主要部名詞から分離することが通常不可能だが，(17)の例に見られる話題化や(18)の例に見られる wh 移動の場合には分離が可能である。

(15) a. *O pai chegou da Maria.
the father arrived of(the)

b. *A escola fica na Avenida da filha.
the school is in-the of-the daughter

(16) a. *Da Maria chegou o pai
of(the) arrived the father

b. *Da filha a escola fica na Avenida.
of-the daughter the school is in-the

(17) a. De seda, comprei uma camisa; de algodão, duas.
of silk [I] bought one shirt of cotton two
〝絹のシャツは 1 枚買い，綿は 2 枚買った。〟

[6] 所有格と属格の違いは，語順において反映されることになる。名詞句の場合には，所有格に対応する格標示要素が存在しないために所有格が認可されない。

b. De história, comprei alguns livros; de matemática, só
of history [I] bought several books of mathematics only
três.
three 〝歴史の本はある程度買ったが,数学は3冊しか買わなかった。〞

c. Do Manuel, encontrei o pai, mas da Maria não
of(the) [I] met the father but of(the) not
encontrei nenhum familiar.
[I] met any family member
〝マヌエルは父親に会ったが,マリアは家族には誰も会わなかった。〞

(18) a. De que menina é que viste a escola?
of which girl is that [you] saw the school
〝君はどの娘の学校を見たの。〞

b. A menina, de quem tu viste a escola,…
the girl of whom you saw the school
〝その娘，その学校を君は見たのだが，…〞（Mateus et al. (2003)）

定冠詞以外の決定詞や量化詞を伴う名詞句の場合，これらの要素を名詞主要部から分離することは可能だが，前置詞〝de〞によって導かれる名詞句を主要部名詞から分離することはやはり不可能である。

(19) a. Livros de história, li alguns.
books of history [I] read several 〝歴史の本は何冊か読んだ。〞

b. Livros de história, li cinco.
books of history [I] read five 〝歴史の本は5冊読んだ。〞

c. Livros de história, li estes.
books of history [I] read these 〝歴史の本はこれらを読んだ。〞

d. Livros de história, li os meus.
books of history [I] read (the) my
〝歴史の本は私のを読んだ。〞

e．Livros de história, li um/uns.
books of history [I] read one some
〝歴史の本は１冊・数冊読んだ。〞

f．*Livros de história, li os.
books of history [I] read the

g．Destruições de cidades, tem havido muitas na
destructions of cities [it] has had many in(the)
Tchetchénia.
Tchetcheny 〝街の破壊は，チェチェンでたくさんあった。〞

h．Fugas de refugiados, vimos várias.
escapes of refugees [we] saw various
〝避難民の逃避を我々はいろいろ見た。〞

⑳ a．*Alguns livros li de história.
several books [I] read of history

b．*Cinco livros li de história.
five books [I] read of history

c．*Estes livros li de história.
these books [I] read of history

d．*Os meus livros li de história.
(the) my books [I] read of history

e．*Muitas destruições tem havido de cidades.
many destructions [it] has had of cities

h．*Várias fugas, vimos de refugiados.
various escapes [we] saw of refugees (*ibid.*)

つまり，前置詞〝de〞によって導かれる名詞句は基本的に主要部名詞句に隣接していなければならないということである。この事実は，この要素が主要部名詞と強い統語的関係を有していることを示している。その一つの可能性は構造格の照合である。所有形容詞の場合と平行的に考えれば，前置詞〝de〞

によって導かれる名詞句も属格の照合を受けるという可能性が考えられる。しかし，所有形容詞と異なるのは，名詞句の場合明示的な格標示要素である前置詞が生起する点である。従って，ここでは属格の照合ではなく，属格の認可がＮの補部の位置にある要素に対してなされると考えておく[7]。上で非文となっている(15)，(16)及び(20)において，前置詞〝de〟によって導かれる名詞句はＮの補部の位置にはない。このため，属格の認可が適切に行なわれずに非文となる。属格名詞句が主要部名詞から離れて生起する(17)，(18)の例は，属格名詞句のA’移動によって生じる痕跡がＮの補部の位置に存在することにより，属格の認可が痕跡を通じて行なわれるために文法的となる。

以上，本節では名詞句にも節と同様に AgrP を設定し，Agr が所有格を照合するのに対しＮ主要部が属格を認可するという基本的な構造を提示した。

3．品質形容詞の統語的位置

本節では，名詞句の構造を考察する上で欠かすことのできない品質形容詞の統語的ステイタスについて議論する。

ポルトガル語においては，多くの品質形容詞は主要部名詞の前後いずれの位置においても生起可能である。一般に，主要部名詞に後続する品質形容詞は指示対象を特定化する制限的機能を持つのに対し，主要部名詞に先行する品質形容詞は制限的機能をもたず，専ら主要部名詞の指示対象に関する付加的情報を提示する[8]。

(21) a．uma criança bonita
　　a　child　pretty　〝(他に比べて）かわいい子〟

[7] 属格の認可に関する詳細な議論は，4節で行なう。

[8] Perini (2002)は，主要部名詞に後続する場合，限定的機能のほかに付加的情報を提示する解釈も可能であるとする。また，直示的意味をもつ形容詞の場合，主要部名詞に先行しても限定的機能をもつ。
　a．o　próximo mês　　b．o　atual　presidente
　the next　month　〝来月〟　　the present president　〝現職の大統領〟

b．o escritor famoso
the writer famous 〝よく知られた作家〞

(22) a．uma bonita criança
a pretty child 〝かわいい子〞
b．o famoso escritor
the famous writer 〝有名な作家〞

位置の違いが重要な意味の違いを引き起こす品質形容詞もある。主要部名詞に先行する場合は主観的意味をもつのに対し，後続する場合は客観的意味をもつ[9]。

(23) a．um homem pobre
a man poor 〝貧しい男〞
b．um homem grande
a man big 〝背の高い男の人〞
c．um funcionário alto
a official tall 〝背の高い役人〞
d．o meu amigo velho
(the) my friend old 〝年を取った私の友人〞
e．uma casa nova
a house new 〝新しい家〞

(24) a．um pobre homem
a poor man 〝哀れな男〞
b．um grande homem
a big man 〝偉大な人〞
c．um alto funcionário
a tall official 〝高級官僚〞
d．o meu velho amigo
(the) my old friend 〝私の昔からの友人〞

[9] Perini (2002)によると，〝novo〞，〝velho〞，〝antigo〞は主要部名詞に後続する場合，客観的意味と話者の個人的判断に関する意味で両義的となる。

e．uma nova casa
a new house 〝今度の家〟

量化的解釈が可能な品質形容詞の場合，量化的意味は主要部名詞に先行する場合にのみ可能である。主要部名詞に後続する語順では，名詞の客観的性質を意味する。

(25) a．diversos livros
various books 〝いろんな本〟
b．uma certa pessoa
a certain person 〝ある人〟
c．uma simples criança
a mere child 〝ほんの子供〟
d．Raras pessoas se aperceberam disso.
few persons noticed (of)that
〝そのことに気付いた人はほとんどいなかった。〟

(26) a．assunto diverso
matter different 〝別の問題〟
b．um amigo certo
a friend certain 〝信頼できる友人〟
c．uma criança simples
a child naïve 〝無邪気な子供〟
d．Ele colecciona objectos raros.
he collects objects rare 〝彼は珍しいものを集めている。〟

いずれかの位置においてしか生起しない品質形容詞も存在する。物理的性質や属性を表すものは，専ら主要部名詞に後続する位置に生起する。

(27) a．um triângulo equilátero
a triangle equilateral 〝正三角形〟

b．um vestido vermelho
a dress red 〝赤いドレス〟
c．a mulher portuguesa
the woman portuguese 〝ポルトガル人の女性〟

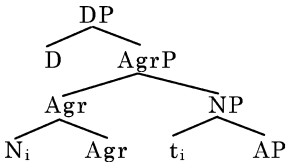
(28) a．*um equilátero triângulo b．*um vermelho vestido
a equilateral triangle a red dress
c．*a portuguesa mulher
the portuguese woman (Mateus et al. (2003))

逆に，量化的意味と関係付けられる品質形容詞は常に主要部名詞に先行する。

(29) a．um mero incidente b．*um incidente mero
a mere incident 〝単なる出来事〟 a incident mere
(*ibid.*)

以上の事実は，名詞句の構造という観点からどのように捉えられるであろうか。本稿では，主要部名詞に先行する品質形容詞と後続するそれは構造的に全く異なる位置を占めていると仮定する。後者は主要部名詞の指示対象を限定することが本来の機能であることからも，NP 内部に併合されると考えるのが妥当であろう。

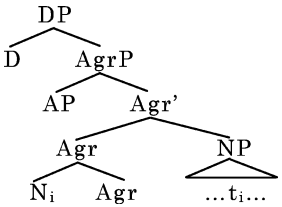
(30)



これに対して，主要部名詞に先行する限定的機能をもたない品質形容詞は，NP 内ではなく，より上位の AgrP 内に併合されると考える。特に，名詞句全体の意味解釈に関わる量化的意味をもつ要素が，機能範疇である AgrP 内に

併合されると考えることは理論的に不自然ではないであろう。

(31)



品質形容詞のもつ意味が，それが生起する統語的位置によって全て説明できるわけではないが，以上のような語順と統語構造の関連性を仮定することによって，品質形容詞が名詞句内で果たす機能がかなり明示的に捉えられるようになる。

以上，本節では，主要部名詞を修飾する品質形容詞の位置に関して，名詞に先行する場合には AgrP 内に，名詞に後続する場合には NP 内に生起することを提案した。

4．名詞の項の統語的実現

前節までで，ポルトガル語における名詞句の基本的な構造を提示した。本節では，主要部名詞が項をとる場合に，その項がどのような形で統語的に実現されるかを考察する。

4.1. 具象名詞

現実世界に存在する具体的な事物を指示対象とする，いわゆる具象名詞の場合，単独で生起することが少なくないが，項を伴うことも多い。この場合，名詞は様々な θ 役割をその項に対して与えるが，その多くに対応する格標示要素として前置詞〝de〞が挙げられる。本稿の分析では，この要素が主要部名詞に後続することから，属格の具現化であると考えられる。

(32) a. o pai da Maria
the fater of(the) 〝マリアの父〞
b. a perna da mesa
the leg of-the table 〝テーブルの脚〞
c. o braço da filha
the arm of-the daughter 〝娘の腕〞
d. a fotografia da rapariga
the photo of-the girl 〝女の子の写真〞
e. o vinho do Porto
the wine of(the) 〝ポートワイン〞
f. a mesa de madeira
the table of wood 〝木製の机〞

主要部名詞の複数の項が，属格によって標示されることも可能である。

(33) a. o quadro do Douro de Júlio Resende
the picture of-the of
〝ジュリオ・レゼンデ作ドーロ川の絵〞
b. o quadro do Douro de Júlio Resende de um coleccionador
the picture of-the of of a collector
japonês
Japanese
〝日本人収集家所有のジュリオ・レゼンデ作ドーロ川の絵〞
(Mateus et al. (2003))

これらの項の語順は，基本的に相互入れ替え可能である。

(34) a. o quadro de Júlio Resende do Douro
the picture of of-the

b．?o quadro do coleccionador do Douro
the picture of-the collector of-the （*ibid.*）

主要部名詞の項は所有形容詞で表すこともできる。所有形容詞は所有者項を表すのが一般的であるが，その他に動作主項や対象項を表すことも可能である。

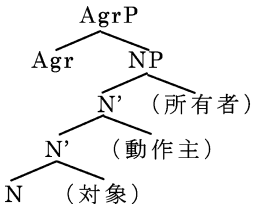
(35) a．o seu livro （動作主・所有者）
(the) his book 〝彼の本〟
b．a sua imagem （対象）
(the) his image 〝彼のイメージ〟
c．a sua fotografia （対象・動作主・所有者）
(the) his photo 〝彼の写真〟

所有形容詞が主要部名詞の前と後ろに同時に生起することも可能である。この場合，興味深いことに解釈に制限が課される。すなわち，「所有者＞動作主＞対象」という階層に従って解釈されるのである。

(36) a minha fotografia tua
(the) my photo your 〝私の君の写真〟
（所有者） （対象）
（動作主） （対象）
（所有者） （動作主）

具象名詞においては，主要部名詞との項である所有者・動作主・対象に対応する名詞句が構造格である属格と結び付けられる。一つの主要部名詞が複数の項の属格と照合されることが可能であるために，(34)のように複数の項が属格で生起することができる。(36)に見られる階層性については，名詞句内においてそれぞれの項が占める位置関係によって説明される。

(37)



名詞句内において最も上位の位置に生起するのが所有者項，それに次ぐのが動作主項で，最下位に位置するのが対象項である。これは，一般的な項構造の階層と一致するものである。(36)においては，いずれの項も人称代名詞で生起している。人称代名詞の場合には，属格の照合のほかに AgrP 指定部に移動して所有格を Agr に対して照合することが可能であった。そこで，いずれかの項が移動することになるが，最小連結条件[10] によって最も上位にある要素が AgrP 指定部へ移動することが要求される。このため，名詞句において上位にある項が所有格の代名詞として名詞に先行するのである。

4.2. 動詞派生名詞

名詞には，具象名詞の他に抽象的な事象を指示する抽象名詞がある。その一つに動詞をもとに形成される動詞派生名詞がある。ポルトガル語の名詞構造を明らかにする上で，動詞派生名詞は興味深い言語事実を提供する。以下では，動詞派生名詞の基本構造を提示した上で，動詞派生名詞句において重要な機能を果たす動作主項の統語的実現について考察を進めていく。

4.2.1. 基本構造

ポルトガル語の動詞派生名詞句において特徴的なのは，動作主項が前置詞

[10] Chomsky (1995)において提示されている最小連結条件の定義は以下の通りである。
Kは，Kに牽引されうる素性を持った構成素の中で，Kにもっとも「近い」ものを牽引する。
Kが α をc統御し，α が β を非対称的にc統御するとき，α のほうが β よりもKに「近い」。

〝de〞ではなく〝por〞によって標示されねばならないという点である。

(38) a. a edificação da ponte pela empresa[11]
the construction of-the bridge by-the enterprise
〝企業による橋の建設〞
b. *a edificação da ponte da empresa
the construction of-the bridge of-the enterprise
c. a edificação pela empresa
the construction by-the enterprise
d. *a edificação da empresa[12]
the construction of-the enterprise (Mateus et al. (2003))

(39) a. a destruição de Timor-Leste pela Indonésia
the destruction of Timor east by(the) Indonesia
〝インドネシアによる東チモールの破壊〞
b. *a destruição de Timor-Leste da Indonésia
the destruction of Timor east of(the) Indonesia
c. ?a destruição pela Indonésia
the destruction by(the) Indonesia
d. *a destruição da Indonésia
the destruction of(the) Indonesia (*ibid.*)

この事実は，動詞派生名詞においては具象名詞と異なる操作が関与していると考えることによって説明できる。動作主項が前置詞〝por〞によって標示される代表的な構文は受動態である。

[11] 前置詞〝por〞は直後に定冠詞が後続する場合，形態的な統合形を形成するため，〝pel-〞という異形態をとる。

[12] 〝edificação〞が動詞派生名詞としてではなく，具象名詞「建物」として解釈される場合，(38 d) は「企業の建物」という意味で文法的となる。この場合，所有形容詞は所有者を表す。

(40) As rosas foram destruídas pelas formigas.
the roses were destroyed by-the ants
〝バラはアリによって破壊された。〞

受動態における前置詞〝por〞を主要部とする前置詞句に関して重要なのは，義務的要素ではないために動詞の項構造に含まれず，随意的要素として付加詞のステイタスをもつという点である。受動態に関する分析はいくつかの可能性が提示されてきたが，その1つにVP殻構造の上位のv主要部に受動形態素PASが併合されるというものがある。このPASは動詞の項構造における動作主に対応する項であり，対格素性ももつ。この分析において前置詞〝por〞を主要部とする前置詞句は，PASの指示対象を明示化するための随意的な要素であり，動作主に対応する名詞句は動詞ではなく前置詞〝por〞によってθ役割を与えられると考えられる[13]。この分析を動詞派生名詞にも適用してみよう。

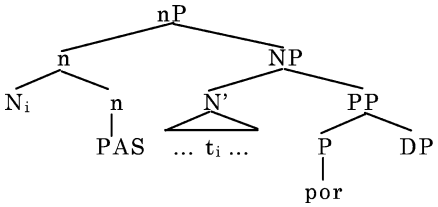
名詞の場合，動詞とは異なり，項の統語的実現は随意的である。

(41) a．a edificação　　b．a destruição
the construction　　the destruction

従って，受動態と全く同じように分析することはできないが，動詞派生名詞の場合にも受動態と同様の構造を想定することが可能である。本稿では，動詞句におけるVP殻構造を名詞句にも適用し，NP殻構造を仮定する。受動態の構造と平行的に，動詞派生名詞においては上位のn主要部にPASが併合されると考えることができる。名詞の項構造において記載される動作主に対応するのはPASなので，動作主を名詞句によって明示化するには受動態の場合と同様に動作主のθ役割を付与することができる前置詞〝por〞が用いられることが簡潔に説明できる。具体的には，以下の構造となる。

[13] この分析は，Baker (1988)によって主張されているものである。

(42)



これに対し，前置詞〝de〟は，既に述べたように構造格である属格のマーカーである。構造格に対応するのは項構造に記載された θ 役割に対応する要素である。動詞派生名詞において明示化される動作主は名詞の項構造に含まれないので，この要素は構造格を持つことができない。従って，動詞派生名詞における動作主は前置詞〝por〟によって標示される以外に方法はないのである。

4.2.2. 品質形容詞によって表される動作主

動詞派生名詞の動作主項が品質形容詞で表される場合もある。この場合，生起可能な位置に強い制約がある。主要部名詞に後続する語順のみが許容され，前置は不可能である[14]。また，対象を表す要素が主要部名詞と動作主を表す形容詞に介在してはならない。

---

[14] 動作主以外の項も形容詞によって表すことが可能であるが，この場合も必ず主要部名詞に後続する。

ａ．preservação ambiental　　（対象）
　　preservation environmental　〝環境保全〟
ｂ．o　palácio presidencial　（所有者）
　　the palace　presidential　〝大統領官邸〟

この事実は，3 節で仮定した構造によって簡潔に説明される。名詞の項である以上，θ 役割を名詞から与えられねばならず，そのためには名詞Ｎの投射である NP 内に併合されねばならない。ポルトガル語では形容詞が NP 内に併合されると名詞に後続する語順となる。名詞に先行する語順では形容詞が NP 内にないので，形容詞が項として θ 役割を受け取ることができないのである。

(43) a. a invasão indonésia de Timor-Leste
the invasion Indonesian of Timor east
〝インドネシアの東チモールへの侵略〟
b. *a indonésia invasão de Timor-Leste
the Indonesian invasion of Timor east
c. *a invasão de Timor-Leste indonésia
the invasion of Timor east Indonesian （Mateus et al.(2003)）

この名詞句の構造を考える場合に重要なのは，品質形容詞も前置詞〝por〟を主要部とする前置詞句と同様，付加詞としてのステイタスをもつということである。すなわち，動詞派生名詞の項構造に含まれる θ 役割には対応しないということである。形容詞は，PAS が担う動作主の θ 役割に対応する要素を明示するための機能を果たしている。この動作主の明示という機能は，PAS と同一の要素を指示するということが前提となるが，このことを統語的に保証する必要がある。前置詞〝por〟を主要部とする前置詞句の場合には，前置詞〝por〟自体が動作主を標示するという機能をもっているので，PAS との一致によって同一指標付けが行なわれると考えられる[15]。

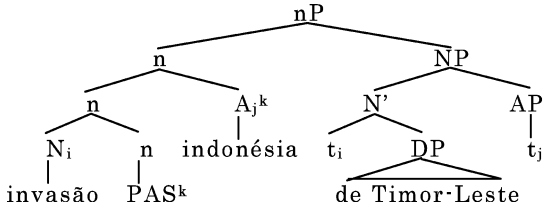
これに対して，そもそも品質形容詞は特定の要素を指示するという名詞としての機能をもたないので，PAS との一致では同一指標付けが確立されないと考えることができよう。そこで，動作主に対応する品質形容詞は PAS に主要部移動することによって同一指標付けがなされると仮定する[16]。（43 a）の

[15] この一致は，具体的には Chomsky (2000)において提案されている Agree 操作によってなされると考えられる。

[16] 2 要素間の一致関係を確立する統語的操作として，Agree と移動という 2 つの操作がある。前者は移動を伴わない操作であるため，2 要素間において一致の前提となる特定の関係が要求されると考えられる。PAS と〝por〟を主要部とする名詞句はいずれも動作主という θ 役割に関わるという共通性をもっているのに対して，PAS と品質形容詞にはそのような共通性が存在しない。このため，よりコストの高い移動という操作によって一致がなされねばならないと考えることができる。

構造を以下に示す。ここで，上付き文字によって示される指標は主要部移動による同一指標付けを表す。

(44)



つまり，形容詞と主要部名詞は統語的に１つの語を形成するということになる。この構造においては，PAS と AP は同じ θ 役割を共有すると考えられる。主要部移動した要素と移動先の要素は統語的に語を形成するので，他の要素の介在を許さない。このため，主要部名詞と形容詞の間に他の要素が介在した例が非文となるのである。

形容詞が主要部名詞に先行する語順が不可能なのも簡潔に説明される。前節で述べたように，主要部名詞に先行する形容詞は名詞句内ではなく，より上位の AgrP 内に位置する。この位置から主要部名詞との同一指標付けのために主要部移動を行なうと，移動が下向きとなる。下向きの移動は理論的に不適切な移動であるため，このような語順が非文となるのである[17]。

4.2.3. 所有形容詞によって表される動作主

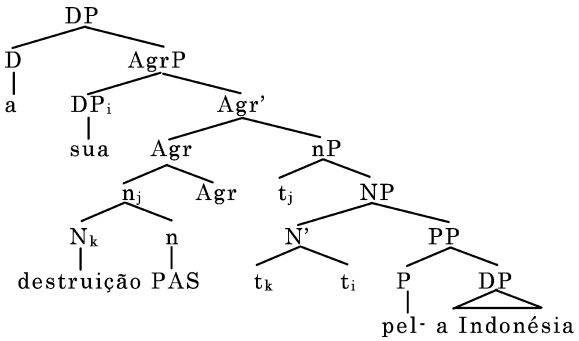
最後に，動詞派生名詞句の項が所有形容詞によって標示される例について検討したい。この場合，所有形容詞は動作主に対応する要素と対象に対応する要素のいずれを表すことも可能である。

[17] 下向きの移動を理論的にどのように禁ずるかには適性束縛条件（Proper Binding condition）等のいくつかの可能性があるが，ここでは詳細な議論を避ける。

(45) a. a sua destruição de Timor-Leste (動作主)[18]
(the) its destruction of Timor east
〝それによる東チモールの破壊〟
b. a sua destruição pela Indonésia (対象)
(the) its destruction by(the) Indonesia
〝インドネシアによるその破壊〟 (*ibid.*)

この事実は，いずれの場合も所有形容詞が所有格をもつことが可能であるということを示している。対象項が所有格で標示される (45 b) は，今までの分析で自然に説明される。NP 内部に生起する対象項が AgrP 指定部に移動して所有格の照合を受けるのである。

(46)



この構造において，前置詞〝por〟を主要部とする PP は付加詞としてのステイタスをもち，それに含まれる名詞句は格照合する必要のない要素である。このため，対象項が移動する際に最小連結条件の違反は引き起こされず，文法的な派生となる。

対象項が所有形容詞で表される場合であっても，動作主項を前置詞〝de〟で表示することは当然不可能である。

[18] ポルトガル語においては，所有形容詞〝seu〟は 3 人称の人間・事物いずれをも指示することのできる形式である。

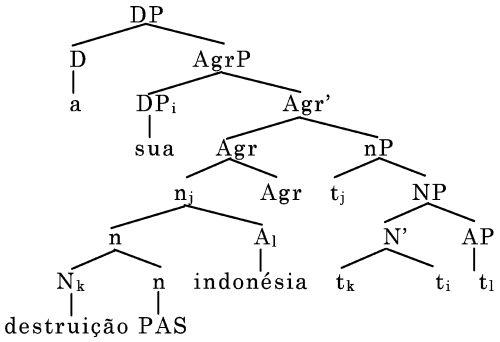
(47) *a sua destruição da Indonésia
(the) its destruction by(the) Indonesia (*ibid.*)

これは，既に述べたように，動作主の θ 役割を PAS が受け取るため，動作主項に対応する他の要素が構造格をもつことができないためである。これと平行して重要な事実は，対象項が所有形容詞で表されている場合には動作主項を形容詞で表すことができないというものである。

(48) *a sua destruição indonésia
the its destruction Indonesian (*ibid.*)

この事実は，動作主項が前置詞句によって明示されている (45 b) と対立をなす。この対立は，前節で提案した形容詞の n 主要部への移動と，前置詞句と形容詞句の性質の違いが関与していると考えることができる。前置詞句とは異なり，形容詞は明確な性・数の素性をもつ要素である。更に，n 主要部へ移動し PAS と同一指標付けされることによって θ 役割も担うことになる。従って，統語的には通常の項と同じステイタスをもつとみなされる。すると，NP 内から対象項が AgrP 指定部に移動する際に，この A を主要部とする AP が対象項の位置を c 統御することから最小連結条件の違反を引き起こし，派生が適格なものとならないと説明される。

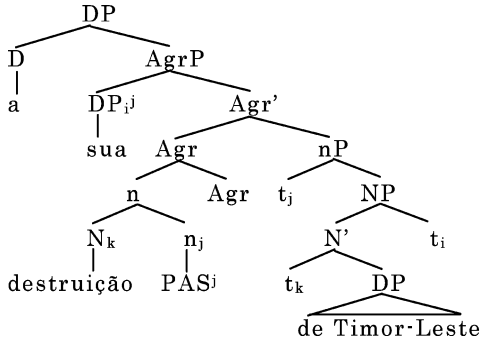
(49)



次に，動作主が所有形容詞によって明示される場合の派生を考えよう。動詞派生名詞句では動作主項として PAS が生起するため，所有形容詞は主要部名詞から θ 役割を受けないことになる。従って，何らかの形で PAS と同一の θ 役割をもつことが保証されねばならない。ここで想起される構造は，動作主が品質形容詞によって明示化される例である。この例では，形容詞が PAS を含む n 主要部に移動することによって PAS との同一指標付けがなされ，形容詞句と PAS が動作主という同一の θ 役割に対応すると分析した。基本的に同じ手続きを所有形容詞の場合にも適用することが可能である。ただし，品質形容詞とは異なり，所有形容詞は人称代名詞として格をもつ要素である。(45 a) では所有形容詞が主要部名詞に先行しているので，本稿の分析に従うと所有格をもつはずである。所有格を照合するには AgrP 指定部に移動しなければならず，品質形容詞の場合と同じ移動が関与していると考えることはできない。では，所有形容詞と PAS の同一指標付けはどのように行なわれるのであろうか。

ここで，PAS を含む n 主要部は Agr 主要部に常に移動するという点に着目したい。(45 a) の構造は以下のようになる。

(50)



この構造において，PAS と所有形容詞は同じ投射の主要部と指定部という位置関係にある。すると，指定部・主要部一致によって同一指標付けが可能となり，PAS と所有形容詞が同一の θ 役割を担うことが保証されるのである。

上記の構造では，指定部・主要部一致による同一指標付けは上付き文字で表されている。

最後に，所有格の認可に関して重要な示唆を与える現象を見ておきたい。既に見たように，動詞派生名詞句において動作主項・対象項のいずれも所有形容詞で表すことが可能であるが，両者を同時に所有形容詞で表すことは不可能である。しかも，二つの所有形容詞が主要部名詞に先行する場合のみならず，一方が主要部名詞に先行し他方が後続する場合も非文となるのである。

(51) a. *a sua sua destruição
(the) its its destruction
b. *a sua destruição sua
(the) its destruction its (*ibid.*)

(51 a)の非文法性は，一つの名詞句において Agr が照合できる所有格は一つだけであるという制約によって説明される。一致によって保証される格は，照合される要素間に 1 対 1 対応の関係を要求するのである。この制約は以下の具象名詞の例からも明らかである。

(52) a. o seu quadro do Douro
(the) his picture of-the 〝彼のドーロ川の絵〞
b. *o seu seu quadro
(the) his its picture (*ibid.*)

これに対して，(51 b) の非文法性の説明はそれほど容易ではない。二つの所有形容詞がそれぞれ所有格と属格を照合されるとすれば，一致という観点から考えると文法的であると予想される。実際，既に見たように具象名詞の場合には二つの所有形容詞が共起する例が観察される。

(36) a minha fotografia tua

つまり，(51 b) の非文法性は動詞派生名詞固有の特性によって引き起こされると考えねばならない。動詞派生名詞固有の特性として，本稿では PAS の存在を仮定した。ここでは，PAS の存在によって (5 b) の非文法性が生じるという可能性を検討したい。主要部名詞に後続する所有形容詞は構造格としての属格をもつと分析したが，この属格は前置詞〝de〟によって標示される場合とは異なる性質をもつ。4.1 節で見たように前置詞句として生起する場合には一つの名詞句内に複数生起することが可能であるが，所有形容詞として生起する場合には一つしか生起できない。

(34) a. o quadro de Júlio Resende do Douro
(53) *o quadro seu seu
(the) picture his its

この事実は以下のように説明できる。前置詞〝de〟によって具現化される属格は，実際の照合が前置詞によって行われる。ただ，これだけでは不十分で，名詞句内に生起する名詞句に付与される属格は何らかの認可条件に従うと考えられる。その属格の認可条件として最も妥当なものは，名詞主要部による θ 役割の付与であろう。θ 役割の付与は，一つの主要部名詞について複数の要素に対して行われても問題がないのは当然である。このため，名詞句の場合には複数の要素に対して属格が認可され，属格名詞句が複数生起することが可能となる。これに対して，所有形容詞の場合には格を標示する要素が存在しない。その理由は，属格の照合が名詞主要部との一致によってなされるためであると考えることができる[19]。一致による格照合は一つの主要部につき一つの要素としか行われない，すなわち 1 対 1 対応の照合関係を要求するので，属格をもつ所有形容詞は一つの名詞句につき一つしか生起できないことになる。

ここで，(51 b) の例に立ちかえってみよう。動詞派生名詞句においては

[19] この一致も Agree 操作によってなされると考えられる。

PAS が存在する。PAS は受動態においては構造格である対格をもつ要素であると分析される。すなわち，格をもつという名詞的な性質をもつ要素である。そこで，動詞派生名詞句においても PAS が構造格をもつと考えてみよう。その可能性として唯一考えられるのは，Nと照合される属格である。すると，具象名詞句とは異なり，動詞派生名詞句においてはNが PAS の属格を照合するために，他の要素に対して属格の照合を行うことが不可能となる。従って，(51 b) において所有形容詞の属格が照合されないために非文となるのである。これに対して，(45 a) においては属格が主要部名詞ではなく前置詞によって照合される。

(45) a．a sua destruição de Timor-Leste

所有形容詞は主要部名詞との一致により属格の照合を受け，全ての要素の格照合が問題なく行われる。このため，(45 a) が文法的となると説明される。

以上，本節では，動詞派生名詞について NP 殻構造を仮定し，上位の n 主要部に項として機能する受動形態素 PAS が併合されると仮定した。この仮定により，動詞派生名詞句における項の統語的実現に関する様々な事実が簡潔に説明されることを示した。

5．結論

本稿では，ポルトガル語における名詞句，とりわけ動詞派生名詞句に関する言語事実を説明する上で，名詞句と節との機能的平行性に基づいて，節について従来提案されてきた構造を名詞句に援用するという方法論を採用した。具体的には，機能範疇 Agr の設定，構造格としての所有格と属格の区別，NP 殻構造の採用及び受動形態素の導入がその中心的な主張である。

第 1 点の Agr については，現在の最小主義プログラムの枠組においては機能範疇Tにその機能が還元されるという Chomsky (1995) の提案が一般的に受け入れられているが，多種多様な言語事実を簡潔に説明するという記述的

妥当性を重視する立場から Agr の存在を保持する考え方も根強く残っていると言えよう。Agr は節における主語と動詞の一致に関わる範疇で，特にヨーロッパの言語において極めて重要な意味をもつことから，この要素を名詞句にも想定することは名詞主要部とその修飾要素との形態的一致という言語事実を捉える意味においても極めて合理的な仮定であると言えよう。

第 2 点の構造格についての仮定は，節における構造格である主格・対格にそれぞれ対応する所有格・属格を設定するというもので，節と名詞句との平行性を格理論の観点から追究したものと位置付けることができる。従来，所有格と属格を構造格として設定した分析はあまり存在せず，名詞句における格の認可メカニズムを明示的に提示しえたという理論的意義がある。

第 3 点の土台をなす動詞句の VP 殻構造分析は，現在の枠組においてその存在を前提とした経験的にも理論的にも説得力のある議論が数多く展開されていることからも，その妥当性に疑念はないと言える。この構造を動詞派生名詞句に適用することは，動詞と動詞派生名詞が基本的に同じ項構造をもつという一般性の高い仮説にその基盤を置くものであり，動詞派生名詞句の果たす意味的機能という観点からも自然なものであろう。

第 4 点の，名詞句において受動形態素を仮定するという分析は一見奇異に思われるかもしれないが，動詞というカテゴリーと密接な関係をもつ同要素を動詞から派生される名詞にも想定するという考え方は理論的に可能なものであると同時に，動作主を表す〝por〟を主要部とする前置詞句が用いられるという動詞と動詞派生名詞との共通性から経験的に支持されると言える。

本稿の分析はポルトガル語という特定の言語における名詞句を対象としたものであるが，もとより生成文法は言語普遍的な特性を，原理という道具立てを用いて簡潔かつ明示的に説明することを最大の目標としている。本稿の分析が言語普遍性という観点から妥当であるかどうかを判断するには，他の様々な言語における名詞句に関わる言語事実を検討しなければならないことは言うまでもない。筆者の今後の課題としては，まずポルトガル語と近い関係にある他のロマンス諸語における当該現象を観察し，本稿の分析の妥当性を検証することが挙げられよう。

参考文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press, Chicago.

Bechara, Evanildo (2003), *Moderna Gramática Portuguesa*, Editora Lucerna, Rio de Janeiro.

Burzio, Luigi (1986), *Italian Syntax*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.

Castro, Ana and João Costa (2003), "Weak Form as X^0: Prenominal Possessives and Preverbal Adverbs in European Portuguese", In Ana Teresa Pérez-Leroux et al. (eds.) *Romance Linguistics*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam and Philadelphia.

Chomsky, Noam (1995) *Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge.

——(2000), "Minimalist Inquiries: The Framework," In Roger Martin et al. (eds.) *Step by Step*, The MIT Press, Cambridge.

——(2001), "Derivation by Phase," In Michael Kenstowiez (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, The MIT Press, Cambridge.

Cuesta, Pilar Vázquez and Maria Albertina Mendes da Luz (1971), *Gramática da Língua Portuguesa*, edições 70, Lisbon.

Cunha, Celso and Lindley Cintra (2001), *Nova Gramática do Português Contemporâneo*, Editora Nova Fronteira, Rio de Janeiro.

Giorgi, Alessandra and Giuseppe Longobardi (1991), *The syntax of Noun Phrases*, Cambridge University Press, Cambridge.

Haegeman, Liliane and Jacqueline Guéron (1999), *English Grammar*, Blackwell Publishers, Oxford.

Jones, M. A. (1996), *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.

Kayne, Richard S. (1977), *Syntaxe du Français*, Seuil, Paris.

Koptjevskaja-Tamm, Maria (2003), "Action nominal constructions in the languages of Europe", In Plank, Frans (ed.) *Noun Phrases Structure in the Languages of Europe*, pp. 723–759, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

Mateus, Maria Helena Mira et al. (2003), *Gramática da Língua Portuguesa*, Caminho, Lisbon.

Perini, Mário A. (1976), *A Gramática Gerativa*, Editora Vigília LTDA., Belo Horizonte.

——(2002), *Modern Portuguese*, Yale University Press, New Haven and London.

Radford, Andrew (1997), *Syntactic theory and the structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Roberts, Ian (1997), *Comparative Syntax*, Arnold, London.
立石浩一・小泉政利（2001），『文の構造』，研究社，東京．